私たちも国体に　参加します

選手にミニわらじの贈り物

岡崎ヨシコさん（97）
備中町平川

「選手や役員の皆さんに渡してください。皆さんの健闘を願って、私が心を込めて作ったものです」と、2月1日市役所で「ミニわらじ」を市長へ手渡したのは備中町平川の岡崎ヨシコさん。ミニわらじは、長さ2㎝、幅1㎝余りで赤や緑、黄色など色とりどり。リリアン紐で編み紅白の水引で鼻緒をつけたもの。岡崎さんが暮らす平川地区は、平成11年ごろ陥没被害が発生。住民らが元気を出そうと開催した「健康の集い」で配られた岡崎さんのミニわらじは「長寿のお守り」として好評になりました。早い時には一足を20分ほどで編みますが、一日に作れるのは15～20足ほど。

市長へ手渡す岡崎さん

そんな岡崎さんは、岡山国体が近づいているのを知り、高梁を訪れる国体選手にミニわらじを贈ることにしました。一年半前から昨年末まで2千足を作りあげ、2足1組をビニール袋に入れて、中の台紙には岡崎さんから選手らへメッセージが書かれています。

「わらじを作ることは生きがい。喜んでもらえることが幸せです。長生きの秘訣は、周りの人に感謝してわらじ作りなどの趣味を楽しむこと。それに毎日、イリコや野菜をしっかり食べて、おいしいお酒を少し飲むことじゃなあ」と笑顔で話す岡崎さん。「皆さんに喜んでもらえるから、まだまだつくります」と意欲満々です。

渡り拍子を披露

布寄渡り拍子保存会長
佐小範明（このりあき）さん（48）
成羽町布寄

なりわ運動公園で開催の高等学校軟式野球競技では、開始式のアトラクションで渡り拍子が披露されます。

会長の佐小範明さんは「成羽町の布寄、長地、日名の渡り拍子保存会(小・中学生の約20人で結成)が合同で行います。各地区に伝わる渡り拍子は、それぞれ異なり、時間も長いためアレンジして5分間で演じられるようにしました。昨年5月のリハーサル大会（写真・下）では、子どもたちはやや緊張ぎみで動きが小さくなってしまいました。本番までにしっかり練習して最高のものを披露したいと思います。昔から地元に伝わる渡り拍子。毎年秋に五穀豊穣を祝って花笠、着物姿で太鼓の音に合わせて神社に奉納するものです。国体での披露は子どもたちの思い出に残ることでしょう」と話しています。また、出場する子どもたちは「大きな跳びで元気よく、みんなで協力して頑張る」と張り切っています。

プラカード持ちで参加

プラカード担当の
高梁東中学校の皆さん

開始式では各チームのプラカードを持ち、選手を先導する式典補助員として市内の中学生が参加します。

高梁東中学校では女子バレーボール部の2年生6人全員に女子テニス部の2年生1人を加えた7人で、バレーボール（成年男子6人制）競技の開始式のプラカード持ちを担当します。「昨年9月のリハーサル大会（写真・左）では、本当に緊張しました。これから、しっかりと練習して、本番では堂々と歩きたいです。みんな緊張すると思いますが、声を掛け合って練習の成果を発揮したいです」と気合十分。

また、バレーボール部顧問の土田晶代教諭は「選手の皆さんに高梁に来てよかったと思ってもらえる大会にするために、私たちに何ができるか生徒とともに考えています。東中では、総合学習の授業などでも国体を取り入れた勉強をしており、生徒たちには、国体にかかわれる誇りと人をもてなす心を持ってほしいですね。きっと将来、大切な思い出となるはず」と期待しています。

選手の皆さんとの交流に期待

地頭民泊協力会長
浅野一彦さん（63）
川上町地頭

晴れの国おかやま国体高梁市実行委員会では、市で開催される競技等に、選手や監督、役員など合わせて約900人が宿泊されると見込んでいます。

市内の営業宿泊施設を優先して配宿を計画していますが、これだけでは、不足するためソフトボール競技に参加する選手や監督について市内各地域15個所を拠点とした共同民泊で対応することにしています。

選手らを受け入れる、それぞれの民泊協力会で受け入れの準備が進められていますが、昨年12月22日に地頭民泊協力会を設立した会長の浅野一彦さんは次のように話しています。「約20人の皆さんにおこしいただく予定。住民一丸となって歓迎するため準備を進めているところです。宿泊は近所のお寺を中心に泊まってもらいます。布団や洗濯機、乾燥機などは市実行委員会がリースで対応します。お寺の門には歓迎のアーチも設置しようと思っています。食事は、1個所でとると決められているため公民館を利用し、料理は婦人会が対応します。これまで何度か試食会を行いました。地元特産のコンニャクや松茸、ヤマメなども食べてもらいたいですね。せっかく来ていただくわけですから、子ども神楽や婦人会の踊りなどを見てもらい、泊まった皆さんには、ぜひ優勝してもらいたいですね。」

地元ではバスを用意して皆さんで応援に駆けつけることにしています。

選手が泊まるお寺の大広間

人生で2回も国体にかかわることに

藤 恭介さん（76）
津川町今津

昭和37年の岡山国体秋季大会では、開会式会場の中央塔にかかげる「大会旗」が、前年の開催地の秋田県から岡山県まで19日間の日程でリレーされました。県内に到着後、県下56市町村（772・3㎞）308区間を継いで、開会式会場の県営陸上競技場へ運ばれました。

高梁市では、剣道競技が行われましたが、旗リレーに参加した藤恭介さんは、「国体のマークのついた白いシャツと鉢巻で大会旗を持って走りました。沿道には、多くの皆さんが駆けつけ応援してくれ、とても光栄でした」と当時を振り返ります。旗リレーの隊形は、先頭を走る先頭隊2人、その後にリュックサック（中には本当の大会旗が入ってた）を背負った隊長1人、少し離れて大会旗を持つ6人、さらに小旗を持った護衛12人、計21人が一隊となって一区間を走りました。

今年4月から町内委員になる藤さん。「地元にも選手の皆さんらが民泊されます。人生で2回も国体にかかわることができ感無量」と話しています。

当時の旗リレー（津川町今津・幡見橋付近）

Y国体事務局（℡㉑0230）